琵琶機関紙
京絃
第三二五号　京絃社

井伊大老と安政の大獄（四）

ばくすい

安政の大獄に犠牲となった人々、何れも惜しむべく痛ましい中で、特に惜しい人物の死が我が国の大きな損失と考えられるのは、橋本景岳と吉田松陰である。松陰は天保元年長州萩の郊外松本村の産、父は藩士杉百合之助で松陰はその次男だが、叔父の養子となって吉田家を継いだ。吉田家は山鹿素行の兵学を伝え、それを以て毛利家に仕えた。松陰もその兵学を継ぎ厳しい教えを受けていたが、嘉永四年松陰二十二才の春、兵学研究のため江戸に出る途中、湊川に楠公の墓に詣でて、

道の為にし、義の為にす、豈名を計らむ、
誓って斯の賊と共に生きず、
嗚呼忠臣楠氏の墓、

吾れしばらくためらいて行くに忍びず

云々の詩を作った。それから松陰は二十三才の春に亘り水戸に滞在し、会沢正志斉、豊田天功等の大家に逢って義公以来の学風に触れ、驚歎して「身、皇国に生れて、皇国の皇国たる所以を知らず、何を以て天地に立たむ」と云った。つまり今までは日本に生れたので自分は日本人だと思っていたが、一たび水戸の学風に触れるや今日まで日本という国家の本質を理解していなかったことが判った。これが水戸学が日本人としての自覚を促し、明治維新に貢献した一因でもある。

それから東北地方へ旅行の途次、佐渡へ渡って順徳天皇陵を拝し、逆賊の為に辺鄙なこの島に流された御不幸に泣き、正しい学を興して道徳を明かにし風教を正さねばならぬと痛歎した。

嘉永六年六月、ペルリが浦賀に来た。松陰は直ぐに浦賀へ来て状況を視察し、海外の情勢や外国に対抗する武力も我が国に無いことを歎き、西洋兵学の師佐久間象山と相談して海外に渡る計画を建て、翌安政元年ペルリ再来の際、伊豆の下田へ行き軍艦を訪ずれて便乗を頼んだが断わられ、これが知れて獄に投ぜられた。下田の獄には十日間ほどで、それから江戸の獄に移され、更に萩の野山獄に移送された。松陰は獄中の人々に孟子の講義を聞かせ皆も喜んで受講した。その有名な〝講孟劄記〟の一節には、

経書を読むの第一義は、聖賢に阿らぬこと要なり。若し少しにても阿る所あれば道明かならず。学ぶとも益なくして害あり。孔孟生国を離れて他国に事へ給ふこと、済まぬことなり。凡そ君と父とは其の義、一なり。我が君を愚なり昏なりとして生国を去って他に往き、君を求むるは、我が父を頑愚として家を出で、隣家の翁を父とするに斉し。孔孟、此の義を失ひたまふこと如何にも弁ずべき様なし。

これは、孔子や孟子を深く尊敬しながら、しかもその根本に大きな誤のある事を指摘したのである。

また、欧米列強の勢力に対抗して、国を護り国を維持する根本の力は、君父のためには命を捨てて顧みないという忠愛の至誠に在る事をも説いている。

獄中での孟氏の輪講は半年続いたがその年の暮れに松陰は出獄して、生家杉家に禁固謹慎を命ぜられた。有名な松下村塾は、初め松陰の叔父が責任者となっていたが、松陰の帰宅により次第にその中心は松陰に移り、安政三年九月松陰は〝松下村塾記〟を作った。

抑も人の最も重しとする所は君臣の義なり。国の最も大なりとする所は華夷の弁な

筑前琵琶演奏大会

六月十四日(日)十時半ー十六時神戸市長田区大塚町上田観正会能楽堂、主催筑前琵琶関西連合会。同会発会記念演奏会で壺坂寺ー近藤旭水▼大物の浦ー谷口旭孝▼伽羅の兜ー竹本旭将▼王昭君ー宮口旭陽生▼誉れの水馬ー三宅旭栄、植村旭照▼坂崎出羽守ー山田旭晃▼綱館ー富樫旭桂、木庭旭山、高千穂旭楓▼石田三成ー塩谷旭洲▼新撰組ー梅原旭濤▼粟津の露ー天津旭八千代▼お蝶夫人ー尾山旭瑞常▼挨拶ー桝本旭風▼菅公ー野坂旭樹・紘笠旭洋▼若き敦盛ー能勢旭陽▼那須与市ー中島旭穂▼二〇三高地ー松尾旭紅、横野旭凰▼月に偲ぶー笠旭洋・紘西川旭操、富樫旭桂、谷口旭孝▼羅生門ー田中旭昇、浜本旭好▼秋風故郷の山ー坂田旭弘▼壇の浦ー柴田旭堂。

琵琶楽名流演奏会

六月十四日(日)昼東京日本橋東京証券会館ホール、主催日本琵琶楽協会（有料）。常陸丸ー斉藤満喜▼王昭君ー初谷旭憲▼小栗栖ー土井旭浄▼軽朝の娘ー水藤桜子▼川中島ー佐藤湘春▼坂崎出羽守ー青木早水▼新撰組ー伴旭友▼湖底の月ー藤波桜華▼彰義隊ー須田誠舟▼竜の口ー田中光水▼大物の浦ー青木旭洲▼城山ー仲川秀邦▼挨拶ー吉川英史▼敦盛(下)ー甲田勧水▼衣川ー若林旭洋▼盛綱先陣ー木原綾子▼菅公ー八東一峰▼天目山ー山下晴楓▼北の庄ー原島旭粧▼細川ガラシャ夫人ー島津天嶺▼接待ー高田栄水▼関ケ原ー林田旭城▼吉野山懐古ー石坂鶴朋▼菊の礎ー藤巻旭鴻▼滝口入道ー遠藤鶴東。

竹下翠風演奏会

六月十四日(日)夕五時半東京新宿安田生命ホール、主催竹下紫風氏（有料）。山吹の里ー渡辺・紘江静、江風▼楠の若葉ー浅香・紘翠風▼秋風故郷山ー石井旭良、井上旭慶・紘青木旭洲、若林旭洋、斉藤旭芳▼河童月夜ー歌琵琶吾妻江雪・三紘吾妻江風▼敦盛ー会主竹下翠風▼広徳寺の危難ー吾妻江風▼養老ー紘翠風、江雪、江静・小紘江風・立方五人。外に竹下光子作短歌舞踊（尺八入）、短歌朗詠六、吟詠三、剣舞一。（鈴木流泉氏〝名月逢坂山〟演奏予定のところ病気のため欠演）。

第十三回薩摩琵琶演奏大会

六月二十八日(日)昼浜松市民会館、主催鶴絃会（会主小野鶴彦氏）来賓出演京都平井春嶺、静岡岡尾鶴城、名古屋阿部秋子、同志水旭城各氏。（次号詳報）

針谷錦古（豊三郎）氏

四月二十六日午前二時心不全のため危逝、享年七十九歳。明治三十五年十二月十五日高崎市に生を亨け大正六年薩摩正派村雨会に入会、翌九年佐藤楳水師を経て大館洲楓師に師事。昭和五年錦心流総伝允許、その間門下から二十数名の奥伝者を出し、晩年は詩吟に力を注いでいた。美声の持ち主で琵琶詩吟の外尺八、ヴァイオリンなど多芸に長じ又書道を良くし群馬琵琶連盟会長その他の要職に在って斯界に貢献した功蹟は誠に大で氏の逝去は惜しい限りである。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。（高崎市岩鼻町局前二四七）。

予告

○：ものがたり琵琶演奏会　七月十一日(土)午後三時東京虎の門発明会館ホール、主催杉山雅俊会（有料）。賛助出演ー仲川秀邦、押川旭葉、友吉鶴心、座間鮫水、山下晴楓、木旭洲、若林旭洋、斉藤旭芳▼河童月夜ー歌琵琶吾妻江雪・三紘吾妻江風▼敦盛ー会主竹下翠風▼広徳寺の危難ー吾妻江風▼養老ー紘翠風、江雪、江静・小紘江風・立方五人。外に竹下光子作短歌舞踊（尺八入）、短歌朗詠六、吟詠三、剣舞一。（鈴木流泉氏〝名月逢坂山〟演奏予定のところ病気のため欠演）。

○：京都琵琶協会七月定例会　七月二十五日(日)午後一時、本部平井会長宅。

○：東西合流一泊弾交房総旅行　七月二十六、七両日、薩摩琵琶鶴絃会、四明会、正絃会共催。

きがとあ

蒸し暑くて降ったり止んだりの梅雨の毎日、小言を云っては済まぬと思いながらも、ツイいややなあと口に出てしまう●あと一ケ月もすれば今度は酷暑の真夏の訪づれである●毎年のことながらこれが繰返せる内は神様が健康な身体を与えて下さっている証拠と感謝しなければなるまい●本号に掲載の〝待宵小侍従〟は琵琶には直接関係ないと思うが、兎角勇壮なチャンバラものの多い現在の琵琶歌中に、こうした軟かい艶物が少しはあっても悪くなかろうと思い敢えて登載した●どなたかこれを題材にした琵琶歌の作詞をして下さいませんか●気候不順の昨今どうぞ充分御自愛下さい。

昭和五十六年七月一日発行（非売品）
編集者　植村寛水
発行所　京絃社
吹田市山田東一丁目
千里台スカイハイツB棟六一四号
〒565
電話〇六（八七五）〇三二六番

り。今天下いかなる時ぞや。君臣の義講ぜざること六百余年、近時に至り華夷の弁をあわせて又これを失ふ。然り而して天下の人まさに安然、計り得たりとなす。神州の地に生れて皇室の恩を蒙り、内、君臣の義を失ひ、外、華夷の弁をわする、則ち学の学たる所以、人の人たる所以、それいづくに在りや。

とあるあたり、その目標とする所がわかる。

松下村塾の中心が松陰となるに及んで学ぶ者が漸増したが、ここで教えを受けた人々が明治維新を導き出し、また明治時代の大事を担当した。それは久坂玄瑞、入江杉蔵、高杉晋作、前原一誠、伊藤博文、山県有朋、山田顕義、品川弥二郎、野村靖らである。

安政五年四月井伊直弼が大老となり、六月には勅許を仰がずに日米通商條約に調印し、之に反対する水戸、尾張、越前、一橋の諸家を処分、次いでオランダ、ロシア、イギリス諸国との條約に調印した。松陰はこれを聞いて老中間部下総守を倒す必要ありとして、塾生と共にその準備に着手したが、当局はこれを知り十二月末再び松陰を野山の獄に収容し、翌安政六年五月江戸伝馬町に転送、同十月二十七日死刑に処した。

松陰三十年の生涯はここに終ったが、死に直面して留魂録の巻頭に〝身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留どめ置かまし大和魂〟巻末に〝七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや〟と書き残した。

鎌倉幕府
源氏一族の盛衰を顧みて（下）

辻　旭城

まづ第一に血祭りにあげられたのは頼朝の弟阿野全成、そして二代将軍となった頼家を病気と称して幽閉するや、側室の里方である比企能員の館を襲い、若狭の局と将軍嫡子一幡をはじめ一族を皆殺しにしてしまった。北條としては、将軍頼家の舅として台頭してきた比企能員が、政権維持には邪魔であったところから襲撃した。更に北條家に悉く反対する将軍自体も全く無用視した。

そこで北條家では、頼家を自分たち一族の領地伊豆修禅寺に護送して、遂に弑逆してしまった。ところが実母と祖父・伯父に殺される頼家の悲劇はまだ終らない。

頼家には一幡の外に公暁、栄実、躾子お三子があった。頼家の死後、政子の計らいで公暁は鶴ヶ岡八幡宮の別当に、栄実も髪をおろして僧籍に入れられた。そして躾子は後に藤原頼経夫人となる。

三代将軍職を継いだのは頼家の弟実朝である。和歌に長じ蹴鞠をよくし貴族趣味の人だったという。他の一説には、兄の悲劇を見聞きして来たため殊更に自分を押さえ、政治には関心を示さなかったのだとも云われている。兎もあれ、おとなしく趣味豊かなお坊ちゃん将軍であった。ただ母の政子は子供の頃から頼家を大変嫌い、実朝を心から愛していた。このため将軍職を継いだ実朝に、破格の従二位右大臣の位が贈られた。

間もなく承久元年（一二一九）一月二十七日を迎え、右大臣実朝の拝賀の式典が、未明から雪の降りしきる鶴ヶ岡八幡宮で華やかに取行われ、武将やその夫人など大勢参列するなかで、祝詞やお祓いなどの式典が終り、神殿を出た実朝が長い石段に差しかかろうとした時、人々の後方にひそんでいた公暁が、突如将軍に飛びかかり、その首を一刀のもとに斬り落とした。一説には、石段下に聳える銀杏の大樹の陰に隠れていて将軍を襲ったともいわれる。この樹は〝公暁の隠れ銀杏〟と今も呼ばれ、鶴ヶ岡八幡宮の名所の一つになっており、樹齢千余年、幹囲七米、高さ約三十米あり今尚樹精盛んである。

一方将軍襲撃を前に三浦義村から、公暁に実朝と執権義時を親の仇としてねらわせ、源氏の手で源氏の系統を断つ陰謀を企てさせたのであるが、襲った公暁は、同時に御剣役として随行する筈の北條義時をも〝世を乱す根元〟として討つ考えでいた。しかし予じめこの事を察知した義時は、当日朝腹痛を理由にこの役を辞していたので難を逃がれた。

巷説には薬師堂谷の覚園寺に祀られている伐折羅大王が、ある夜義時の夢枕に立ち、当日の災難を事前に知らせたので助かったと伝えられているが、このことから見て前述の三浦の扇動について疑問を感じる。要は将軍職をねらう北條、三浦両家の対立ではなかったろうか。

実朝を殺害した公暁は、大幹部の三浦一族を頼って要職を依頼したが、北條家の底知れぬ権力に恐れを抱いていた三浦家は手も足も出ず、義時の厳命で三浦家臣の手によって殺され、栄実も公暁に先立つこと四年、建保二年（一二一四）源氏に縁故の深い和田義盛にかつがれ、源氏再興を夢見て北條、三浦討伐のため挙兵奮戦したが、武運つたなく敗れて無惨な最期をとげたため、ここに〝源家直系〟の血脈は完全に絶たれたのである。

琵琶歌中の詩吟・和歌朗詠考

編集部

（琵琶歌―菅公）

九日後朝同賦秋思応制　菅原道実

函相廃年幾楽思　今宵触物自然悲
声寒絡緯風吹処　葉落梧桐雨打時
君富春秋臣漸老　恩無涯岸報猶遅
不知此意何安慰　飲酒聴琴又詠詩

しようじようやむるとし　いくたびから　くしせん、こんしようものにふれて　しぜんにかなしむ、こえさむくして　らくいかぜふくところ、はおちてごとう　あめうつとき、きみはしゅんじゅうにとみしんようやくおゆ、おんはがいがんなくして　ほうなおおそし、しらずこのいなんぞあんいせん、さけをのみことをきき　またしをえいず。

道実が九月十日「秋思」の題で天皇の命により作詩したもの、大臣を廃めると物に触れ何となく悲しいと云う道実は翌年配流となった、或いは前兆であろう。「九月十日の詩」の〝秋思の詩篇〟はこれである。

函相＝大臣　廃年＝やめるその年　楽思＝楽しい、思は助辞　絡緯＝機織り虫のこと　梧桐＝青桐　涯岸＝はて、限り。

（大意）君の寵愛を受けて右大臣となり、来る年も来る年も幾度となく年も忘れて楽しい思い出をした。今宵は総て物事を見聞するにつけて物悲しく思える。たとえば秋風の吹くところ機織り虫の鳴く声も寒気に聞こえ、梧桐が雨に打たれて一葉落ちるのを見ても漫ろに秋を感じる、君は御年若いけれども臣道実は既に老いました、君の恩は広大だがいつになったら御恩返しができることか、誠に勿体ない、相済まぬ事と不安に堪えない、せめては酒を飲み琴を聴き又詩を詠じてお相手申し上げたい。

（琵琶歌―常陸丸）

噫常陸丸遭難将士　工藤武城

敵艦無情襲我船　焼旗伏刃謝東天
猶思玄海蕭條夜　鬼哭啾々弔昔年

てきかんむじよう　わがふねをおそう、はたをやきやいばにふして　とうてんにしゃす、なおおもうげんかい　しゅくじようのよる、きこくしゅうしゅうとしてせきねんをとむらう。

（作者は鹿児島の人、医師、号担雪）

蕭條＝淋しい有様　啾々＝哭く声。

（大意）ロシアの艦隊は戦闘力のない運送船常陸丸を討ち沈めた。我乗組員は軍旗を焼き皇居を遙拝して万歳を唱え、輸送指揮官須知中佐以下全員自刃した。今尚この玄海灘を通れば、淋しい夜に鬼すら啾々と哭いて当時の昔を偲び吊うのである。

〝敵は本能寺〟（上）

高橋邦次

「人間五十年、夢まぼろしの如くなり」。桶狭間の合戦で歌った織田信長は、その言葉通り四十九歳で生涯を閉じた。衆知の〝本能寺の変〟である。しかし信長の晩年は蠟燭の灯の、最後の明滅のような輝きを見せる。

信長が死ぬ三年前に安土城が完成した。そ

の祝賀行事の一環として翌天正九年（一五八一）二月二十八日、信長は明智光秀に命じて〝京都御馬揃（ぞろえ）〟を催した。場所は京都御所の東側、ここに大馬場を特設し、全国各地の名馬を一堂に集めた。天皇をはじめ貴族、大名たちの特別招待席が設けられ、地方からも見物人が押し寄せて祇園祭を凌ぐ盛況ぶりである。信長は梅一輪を奥衿に差し、名馬コンクールや各種競披に声援をおくった。

ところが、名馬揃いの中で特に目立つ立派な一頭の馬がいる。「あの天晴れな馬の所有者はさぞ名のある大名ならんか」と信長が問うと、審査員が「否、五百石取りの山内一豊という無名の武士のもの」と答える。一豊の妻が万一に備えてひそかに貯えた金を夫に差し出し、漸く一豊が手に入れたものだという。

信長は「お蔭で織田家の名誉を保ち、武士の心懸けも立派である」として一豊に褒美を与えている（信長公記）が、本当は夫よりも妻が褒めらるべきであろう。

その頃の信長は、十一年越しの戦いを続けて来た石山本願寺（大阪）も、前年四月に降伏して朝日の昇るような上機嫌であった。この本願寺は四十四年前の〝法華一揆〟で滅亡した京都山科本願寺の代りに、大阪石山（現在の大阪城附近）に新造された一向宗の大本山。信長のために各地の一向一揆が破れ去るにつれて、石山でも和戦派の顕如と抗戦派の教如の二派に別れていたが、顕如・教如の父子は共に隠世して信長に降った。開城の際火をつけた城は三日三晩燃え続けたという。

本願寺に勝った信長は、更に徳川家康の助勢で柴田勝頼（信玄の子）を天目山の合戦（天正十年―一五八二）で滅ぼした。信長落命の三ケ月前である。

その時の信長は残忍至極であった。武田一門を殺したのは戦争の常であるが、故信玄の菩提寺（恵林寺）が武田の残党をかくまい、自刃した勝頼の供養をすると、快川（かいせん）長老ら同寺の関係者百五十人を山門の楼上に集めて焼き殺した。快川和尚が「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と詠じながら世を去ったのはこの時である。

武田勝頼を亡ぼした殊勲者徳川家康の労を犒らうため、同年五月十五日、家康を安土城に招いた。その供応役を命じられたのが明智光秀であった。

光秀は万全を尽くしたが、偶々台所の生魚がいたみ悪臭を放っていたことから、信長は光秀を厳しく叱責し、供応役を僅か三日間で罷免して即刻中国へ出陣を命じた。光秀の面目まるつぶれであるが、これは主客の家康に対しても無礼であろう。

十九日家康を招いた舞いの会で、梅若太夫の舞踊にケチをつけて「御能不出来に見苦しく候」と、満座の前で梅若を殴り倒すなどその頃の信長は焦操が烈しく、二十一日家康を京阪や奈良等の観光に旅立たせるや、すぐ安土城に帰って秀吉苦戦中の中国毛利に対する作戦を練り、二十九日再び入洛して本能寺に総司令部を置いたのであるが、一方接待役を免じられた光秀はどうしていたか？。

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏期特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京紘援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月五日迄に御申込み願います。

短編曲　本能寺

飴谷六水構成

時は今　天が下知る五月（さつき）かな
近臣僅かに百余人
織田右大臣信長は
本能寺にぞ入りにける
引従えて京都なる
時こそ来たれと光秀は亀山城に諸将を集め
積もる怨みの数々を　数え立ててぞ弑逆の
大事をこそは企てけれ各々部下を引緊めて
中国勢を援わんと　偽り向う大江山
迷う心は堅木原（かたぎはら）　恨みも深し桂川
渡らん駒の足並は　東（ひがし）さしてぞ進みける
本能寺溝深幾尺　吾就大事在今夕
吾敵正在本能寺　敵在備中汝能備

茲に始めてふた心　覚（さと）るもおそし軍勢は
いつかは消ゆる露の身の　主に捧ぐる外ぞなき
黙々として言葉なく　長蛇の走る様に似て
旗指物の動くのみ　かかることとは露知らず
一夜をここに信長は　旅寝の夢も短か夜の
明くるに早き鐘の声　夢かうつつか
微かに聞こゆる人馬の物音　館（やかた）に迫ると覚ゆれば
こは訝かしと信長は　疾く見届けとありければ
森蘭丸かしこまり　表の方に走り出で
見越しの松に上半をかけ　右手を翳して見てあれば
さ霧の中に翻える　水色桔梗の旗じるし
見るより蘭丸引返し　光秀謀叛と答うるに
赫と怒りて信長は　者共覚悟と呼ばわりて
薙刀押っ取るひまもなく　軒に火は這（はう）う本能寺
首を回らせば　五十有余年
人間の是非は　一夢の中（うち）
見果てぬ夢の白綸子　しらじら明くる夜と共に
刃に伏してぞ果てにける」

待宵小侍従

郡　恵一

待つ宵の更けゆく鐘の声聞けば
帰るあしたの鶏はものかわ

位人臣をきわめた平清盛を、その総師と仰ぐ平家一門がまだ権勢を誇っていた頃、平安京は近衛河原の御所（近衛帝の后・藤原多子の邸）で、ある時「訪ね来る恋人を待ちわびる宵と、帰りゆく後朝（きぬぎぬ）の別れとは、果たしてどちらに興趣が湧くであろうか」とお尋ねあったところ、仕えていた一人の侍女が首記の和歌―待つ人は来たらず怨みの宵も刻々と更けてゆき、その時を告げる鐘に聞き入るばかりのやるせなさに比べれば、彼を送り出す翌朝の鐘の声など何ともありませんーと詠んだので、それからの彼女は〝待宵小侍従（まつよいのこじじゅう）〟と呼ばれるに及んだという。

時は流れて治承四年（一一八〇）の六月二日、清盛は突如福原への都遷（みやこうつし）を決行した。いわゆる南都北嶺（興福寺・延暦寺）の圧力、騒動を避けるためで、程なく公卿たちよりの非難の高まりと共に、同年十二月二日京へ都帰りとなる。その中秋八月十日も過ぎた頃、公事担当の首席公卿徳大寺実定は、旧都（京）の月を恋慕って帰洛し、荒廃の只中に昔ながらの面影を残す近衛河原の御所に、姉・二代の后（藤原多子）を訪ねた。そして待宵を召し出して昔語りをし、次第に更けゆく古都のあわれを〝今様〟（平安後期に流行の歌謡）に謡ったりして、夜明けとともに福原へ帰って行くのであるが、途中「小侍従が大層名残り惜し気にしていたから、何とか云って慰めてやってくれ」と供の蔵人に命じて引返させたところ、小侍従は

待たばこそ更けゆく鐘も物ならめ
あかぬ別れの鶏の音ぞうき

（訪ね来る筈の男を待つ身ならば、更けゆく時の鐘の音はやるせなく聞こえもしようが、そうでない折には名残りのつきぬ別れを誘う鶏の声に、悲しさを覚えるものなのですー女にとっては。）

と、溢れる涙を押さえつつ、得意の和歌で胸の思いを詠み上げた。

「平家物語」巻五の〝月見〟の章に照らし出された待宵小侍従は、石清水別当光清の娘とされる以外は不明である。

沖縄行

田中歉水

三月三日から三泊四日の沖縄旅行の途次、姫ゆりの塔に詣でて大阪石橋旭嶺氏が琵琶〝姫ゆりの塔〟を熱演献奏して一般参拝者をも感激せしめた。

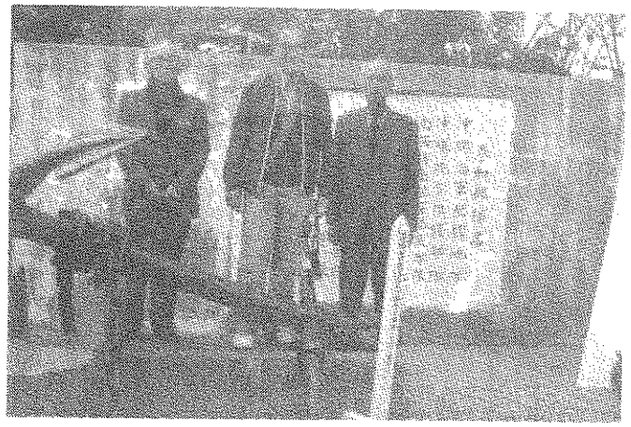
沖縄南部をハイヤーで一巡したが、買い求めた日本最後の戦いの一冊を読んで、苛酷な戦闘を想い涙新たなるものがあった。日本の防波堤となった沖縄を忘れてはならぬ、旧海軍壕を見て、最後の策戦を練った有様が想起された。

棚町整大佐の歌日記（旧海軍防空壕にて）

を次ぎに記す。

思い見よ只一挺のつるはしに
この壕抜きし人の力を
将軍もベット並べて幕僚と
眠り給へり缶詰の上に
陸軍兵二百余り割り込みて
只さへ狭き壕を塞ぎつ
突撃は間近なるらし部落燃え
照明弾下砲声激し

（昭和二十年六月十三日自決。）



（中央筆者、左　石橋旭嶺）

五月九日（土）
梅原旭濤女史宅
「協会筍会の記」

西向日市、阪急停留所下車、南へ二〇〇メートル、住宅地の一角に筑前琵琶教授の看板を掲げた美しい邸宅が旭濤さんのお住まいである。玄関から屋敷の周りは緑滴らんばかりで、静寂な感にさえ打たれました。

二階お座敷の床の間、飾り棚の貴重品、骨とうの類や掛軸が目につく。

二時ごろには会員たち打揃い、和気あいあいの談笑の裡に、三時すぎより演奏が始まった。

1. 楊氏夫人：菅公ー錦心流、素直な歌い方猛練習振り。
2. 桜井旭富氏：壇の浦悲曲ー筑前、音量豊か、弾法研究に専念。
3. 山岡旭清女史：菅公ー筑前、魅力ある声、生気溢れる。

五時ごろ会主旭濤さんの真心こめた筍料理が運ばれ、かいがいしい接待姿を拝見、その上、美しいお辨当が列べられてテーブルはご馳走風景に一変して賑わった。

乾盃のあと、ご馳走を賞味しながら話題百出の楽しい集い、六時すぎ平井会長以下恒例筍会の名残りを惜しみつつ帰途についた。

因に旭濤門下、高橋さんのお手伝振りといい、若々しく明白な話し振りでのサービス、合せてお礼申します。

出席者氏名（十三名ー順位不同）
平井会長、同夫人、楊嶽水、同夫人、安住旭康、桜井旭富、牧秋静、矢吹旭美津、林旭蒻、山岡旭清、馬場鴨水、梅原旭濤、高橋

五、一〇（鴨水記）

総本山大念仏寺に琵琶献奏

五月三日(日)昼大阪平野の大念仏寺に於ける聖応大師八百五十回忌大法要に大阪琵琶同好会の協賛で左記献奏。大念仏寺融通念仏歌ー会員一同▼城山ー米田▼岩壁の母ー上村、坪田▼河内の宿ー玉村▼菊水の旗ー水谷旭甫▼白虎隊ー矢野旭信▼桜ー八千代会社中▼小栗栖ー朽木旭女▼本能寺ー石田旭城▼湖水渡ー島津旭都▼石童丸ー西村旭瑞▼吉野懐古ー辻旭城▼青葉の笛ー作花旭友▼大念仏寺縁起妻の片袖ー石橋旭嶺▼菊水の旗ー松本旭勇▼二〇三高地ー奥村旭美▼安宅の関ー天津八千代。外に詩吟、剣舞、日舞等十番。

関西橘会の研修会

五月十日(日)朝十時高槻市富田町自治集会所。筑前琵琶橘流を正しく受け継ぎ、又新しく残して行く目的のための催しで、山崎旭萃女史を筆頭に林田旭城、渡島旭鶯、矢吹旭美津、菅旭香各女史をはじめ十代、二十代の若い人らを含めて約三十名が出席、歌絃の一節一節を山崎女師直接の指導により研修者一同真剣に取り組み、和やかな空気の裡に夕四時終了した。当日は朝九時半までに数名の会員が来場し会場準備中の関係者を慌てさせた一幕もあり、研修生の旺盛な意慾に感激させられた。

（通信）

日本芸術琵琶普絃会五月例会

五月十七日(日)昼東京文京区大塚の貸席京屋。強雨を物ともせず十五名参集。白虎隊ー杉山富士代▼湖水渡りー内田隆章▼王昭君ー鈴木好水▼衣川ー佐藤旭尚▼俊寛(上)ー坂入晴峰▼俊寛(下)ー高田栄水▼北の庄ー金森旭弾▼異国の丘ー青木早水▼湖水乗切ー福島脹水▼潯陽江ー山本隆水▼本能寺ー長谷川錦舟▼演奏なしー若宮旭登、杉山旗水。尚初心者に対し語りの正しい発音について高田栄水氏の指導があり小宴の後七時散会した。

京都琵琶協会五月例会

五月二十四日(日)昼本部平井会長宅。生憎くの雨天であったが月一回の例会が待ち遠いように馬場鴨水、林旭蒻、田中歓水、梅原旭濤、矢吹旭美津、山岡旭清、安住旭康、牧南水、木下皇水、平井春嶺、植村冥水の各会員及び彦根西川磯水氏らが楚々として参集、また故名人児玉天南師の孫児玉立志氏も来遊され、まづ①牧会員の昭介で西川磯水氏入会の希望を謀って一同承認歓迎、②東西合同一泊弾交旅行（別項〝予告欄〟参照）の勧誘を平井会長から発表、続いて研修演奏に移り小栗栖ー田中▼那須与市ー牧▼茨木ー西川▼坂崎出羽守ー木下▼その日の東郷元帥ー平井。そのあと乾盃夕食を共にして和気靄々裡に七時半散会した。当日筑前琵琶の演奏が無かったのは些か物足りない感がした。

遠参琵琶交歓演奏会

五月三十一日(日)十時ー十七時静岡県新居町浜名湖厚生会館、当番薩摩琵琶鶴絃会（会長小野鶴彦氏）。（一水会豊橋支部）菅公ー鈴木▼竜のロー小川清水▼楠正成ー小林典水▼吹雪の敵ー山本宝水▼舟弁慶ー石黒石水▼戦艦大和ー吉見輝水▼桶狭間ー菅沼穣水▼乃木将軍ー神藤畝水▼敦盛ー田中訢水▼（鶴絃会）金剛石ー芥川▼四十七士ー村木ほか▼万葉の里ー大場暁惺▼母の教ー川口暁江▼酒ー石川輝晃▼竹生島ー竹原輝祥▼桜狩ー大石鶴伶▼蚓蛾ー染谷鶴泉▼小松の操(二)ー伊藤鶴麗▼白虎隊ー三上鶴浄▼ひめゆり部隊ー柿沢篁峰▼坂本竜馬ー小野鶴彦▼（来賓）竜のロー岡尾鶴城。

第四回琵琶楽名流会

五月三十一日(日)十時半ー十六時京都烏丸御池京都商工会議所ホール、主催日本琵琶楽協会関西支部（有料）。天気予報では当日は雨とのことで心配されたが意外にも終日好天となり聴衆も開会前からつめかけ正午過ぎには満員の盛況を呈し効果的な会で終始した。武蔵野ー平井春嶺▼堅田落ー櫛田旭波▼小栗栖ー田中歓水▼衣川ー福西旭紅▼会津白虎隊ー川上琵水▼別れの盃ー大迫旭山▼伽羅の兜ー高千穂旭楓▼羽衣ー内田欽水▼五條橋ー浜本旭好、田中旭昇▼俊寛(上)ー伊勢谷安江▼羅生門ー中島旭穂▼井伊大老ー反町紫水▼源実朝ー佐竹旭都▼須磨の敦盛ー楊嶽水▼壇の浦悲曲ー林田旭城▼坂崎出羽守ー木下皇水▼屋島の誉ー牧秋静▼新撰組ー梅原旭濤▼彰義隊ー島津天嶺▼由比ケ浜風ー柴田旭堂▼戦艦大和ー三浦蓮水▼大楠公ー山崎旭萃。このあと記念撮影に続いて地下のレストランで乾盃目出たく散会した。

日本琵琶悠絃会五月例会

五月三十一日(日)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏ー錦幽、一峰▼利休の最期ー山崎錦幽▼誉れの水馬ー伴旭友▼潯陽江(上)ー大富士岳鮮▼川中島ー佐藤湘春▼景清ー金尾洲丈▼詩吟二題ー天羽岳水▼水戸八景ー畑寡水▼新撰組ー中村洲心▼坂崎出羽守ー青木早水▼菅公ー八束一峰▼竜のロー大井錦淀▼彰義隊ー清水源城▼山中の月ー成田香豊▼月夜荒城の曲を聞くー木村香詠▼舟弁慶ー長谷川錦舟▼久遠の乙女ー軽部岳瑞。来賓会田豊作、仲川秀邦、東流荒牧氏息女。六時散会。